

ディケンズとマルサス(1)

—『クリスマス・ブックス』理解のために—

榎 本 洋

1・序

ここで言う『クリスマス・ブックス』(*Christmas Books*)とは、1843年に発表された有名な『クリスマス・キャロル』(*Christmas Carol*、以下『キャロル』と略)を皮切りに、1847年12月は除いて翌年の48年まで、12月になると毎年、発表されてきた五つの物語を指す。『キャロル』以下、物語は順次、次の通り発表された。『鐘の精』(*The Chimes*、44年)、『炉辺のこおろぎ』(*The Cricket on the Hearth*、45年)、『人生の戦い』(*The Battle of Life*、46年)、『憑かれた男』(*The Haunted Man*、48年)などがその内訳である。この頃のディケンズは、イタリア(1844年7月から翌年、6月まで)、更に一年置いて1846年6月から11月まではスイス、翌年の2月まではパリ滞在など、アメリカ旅行から帰国したにも拘らず、腰の定まらない海外生活の傍ら、クリスマス物語集を執筆する、多忙だが、生産的な生活を送っている。ディケンズの年譜等を見れば、容易にその活動は一瞥できる。大切なのは、それらの物語の前後を縁取るかのように『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*、『マーティン』と略)、『ドンビー親子商会』(*Dombey and Son*、『ドンビー』と略)というディケンズの前期から中期の過渡期にあたる時期に、これらの諸テキストが続々と生産された事である。バットが“The years between *Martin Chuzzlewit* and *Dombey and Son* would seem therefore to be crucial for his development as a novelist; and these are the years of the Christmas Books” (Butt,131) と指摘するように、作家としてのディケンズが大きく変貌する時期でもある。なぜなら、『マーティン』、『ドンビー』らが「利己心」、「自負心」といった抽象的なテーマに基づき、テキストの緊密性という芸術性に腐心したのに比べ、クリスマスの物語群に濃厚なのはかなりあからさまな社会意識、批判である。勿論、前者の統一的なテーマも鋭い社会意識があつてこそ

愛知県立大学文学部論集（英文学科編）第56号（2007）

生じたものであろう。違いはその社会批判がある特定の思想に向けられたことである。その点、フェール（Bernhard Fehr）はスクルージ（Scrooge）が口にする「余剰人口」（“surplus population”）という「標語」（Schlagwort）を手がかりに、次の様に指摘する：

Schlagwörter weisen auch auf eine herrschende Theori, eine anerkannte Lehre hin. Bis jetzt hatte Dickens nur Missstände zum Gegenstand seiner Satire gemacht. Nie hatte er sich gegen ein System, gegen eine Theorie gewendet. Die erste Weihnachtsgeschichte bedeutet deshalb einen Wendepunkt in seinem Streben und Schaffen. (Fehr, 544)

フェールはこの後、ディケンズの社会批判に影響を与えたカーライル（Thomas Carlyle）の存在を認めており、社会思想のディケンズへの影響を扱った先駆的な論文として高く評価できる。いずれにせよ、クリスマスの物語群は、ある特定の思想を意識した社会批評が展開された意味では、紛れもなくディケンズの転換点なのである。

『クリスマス・ブックス』の中でとりわけ『キャロル』、『鐘の精』の中で標的にされているのが、後者に登場する市参事会員キュート（Alderman Cute）の口を突いて出る“the first principle of political economy”(113)である。これこそマルサス（Robert Malthus, 1766-1834）の『人口に関する試論』（*An Essay on the Principle of Population*, 1798。以下『人口論』と略す。）であり、それに基づくかなり通俗的な学説、言説の流布である。テキストではそれを思わせる台詞が幾つかある。クリスマス・イヴの当日、“to raise a fund to buy the Poor some meat and drink”(11)と寄附を求めに遣って来た紳士に対して、スクルージは“If they would rather die, . . . they had better do it, and decrease the surplus population”(11-12)とうそぶく。この「余剰人口」という言葉は、現在の幽霊がタイニー・ティム（Tiny Tim）の将来の死を予感するとき、“... If he be like to die, he had better do it, and decrease the surplus population”(55)とスクルージと全く同じ言葉で反復される。この“decrease the surplus population”という「余剰人口を減らす」という

標語についてはワールズ・クラシックス版の編者グランシー (Ruth Glancy) がマルサスの名を挙げている。但し、グランシーが念頭に置いている『人口論』は初版ではなく、第二版であるが、理由はともかく、ここでは初版のテキストも含めて検討する予定である(473)。ところで、こうしたディケンズのマルサス批判が頂点に達するのが第二作の『鐘の精』である。主人公トロッティ・ヴェック (Trotty Veck) は娘のメグ (Meg) が持ってきた“Tripe”という家畜の臓物を煮た粗末な夕食に舌鼓を打っているところを“Taking into account the number of animals slaughtered yearly within the bills of mortality alone; . . .”(110)と、トロッティの食事が500人分にも相当する、とファイラー (Mr.Filer) は統計数字を用いてトロッティを非難する。更にメグ、リチャード (Richard) の結婚の予定を聞き、不可解な怒りを爆発させる。

‘You are going to be married, you say,’ pursued the Alderman. ‘Very unbecoming and indelicate in one of your sex! But never mind that. After you are married, you’ll quarrel with your husband and come to be a distressed wife. You may think not; but you will, because I tell you so. Now, I give you fair warning, that I have made up my mind to Put distressed wives Down. So, don’t be brought before me. You’ll have children — boys. Those boys will grow up bad, of course, and run wild in the streets, without shoes and stockings. . . . I’ll convict’em summarily, every one, for I am determined to Put boys without shoes and stockings, Down. Perhaps your husband will die young (most likely) and leave you with a baby. Then you’ll be turned out of doors, and wander up and down the streets. Now, don’t wander near me, my dear, for I am resolved to Put all wandering mothers Down.’ (114-5)

“put down”が口癖のキュートも更に加わり、結婚した労働者夫妻の絶望的な未来図を描いて、婚約者たちはもとよりトロッティすら絶望的な気分にしてしまう(115)。

『クリスマス・ブックス』を見る限りマルサス批判は、『キャロル』、『鐘の精』に限られるが、ディケンズのマルサスに対する反発はかなり根強いものがあり、

それ以外のテキストでも散見される。例えば『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)では実業家グラッドグラインド (Gradgrind) の息子にマルサスという名前が付けられていたり、『ニコラス・ニッケルビー』(*Nicholas Nickleby*, 1838)では“*There are people enough in the world, Heaven knows! And even in London . . . but few complaints prevail of the population being scanty*”(1)といった具合にマルサスの『人口論』が投じた波紋の大きさを窺わせる記述に出くわす。前作の『オリヴァー・ツイスト』(*Oliver Twist*, 1837)が救貧批判を掲げ、そもそもそれがマルサス理論により齎されたことを考えれば、ディケンズの社会批判がそこへ向かうのは予想されることである。実際、マルサス理論への反響は大きかった。しかも、ホブズ(Thomas Hobbes)の伝統に連なり、人間を本質的に“*innately bad, or if not bad, at least recalcitrant and refractory. Virtue was attainable only through great effort, and natural man was disinclined to such effort*”(Himmelsfarb, 97-8)と無慈悲に見るマルサス理論が、基本的にhumanitarianである当時の文学者、カーライル、シェリー(P. B. Shelly), コールリッジ(S. Coleridge), ワーズワース(W. Wordsworth), ハズリット(W. Hazlitt), ディズレイリー(Disraeli)らの猛烈な反発を買ったという。つまりマルサスの『人口論』は、同時代の作家の社会批評のあり方を考えるとき、必ず言及の対象となるものであり、この存在を抜きにして当時の社会批評を考察することはほぼ不可能である。これは一方では、マルサスの著作がミル(John Stuart Mill)の『国民経済学』(*National Economy*, 1821)、マカラッフ(MacCulloch)の『政治経済学原理』(*Principles of Political Economy*, 1825)、ハリエット・マーティノー(Harriet Martineau)の『政治経済学解説』(*Illustrations of Political Economy*, 1832)等の政治経済学関係の流行を促し(Fehr, 547)、当時の社会改革(今風の言い方なら構造改革)に作用したことを考慮すれば、その存在感の大きさがわかるだろう。しかも、こうした風潮の背後には“*The fear of over-population and the consequent struggle for survival troubled even those minds who cared little for the minutiae of economics*”(Chapmann, 17)と人口の動静に一方ならぬ関心が寄せられていたからである。

この論文では『クリスマス・ブックス』の『キャロル』、『鐘の精』、を中心に、ディケンズがマルサス理論や流布したマルサス的な言説に対してどのよう

に向き合い、取り組んだかを考慮する予定である。五作のクリスマス物の中で最初の二作を中心にしたのは、三作目の『炉辺のこおろぎ』以降、物語の舞台が明らかに“domestic”な領域へ、急進的な社会改革よりも心情と友愛へ訴える方向へと転回したからである(Muresianu, 40)。勿論、論証の過程で必要があれば、これらのテキストも参照する予定である。ともあれ、こうした論証の過程でディケンズの社会批評のあり方、マルサス的な経済個人主義に対してどのような解決策を見出したか、そしてディケンズが読者に対してどのような立場にあったか等を考察することで、ディケンズの社会批評の質的な性格を明らかにしていく予定である。

それでは、まずディケンズが対峙したマルサスの『人口論』(1798)はどのようなテキストであったのだろうか。その内容を検討してみよう。

2・マルサスの『人口論』:「生」と「性」を抑圧する言説

マルサスは1766年にロンドンで裕福な農場主の次男として生まれ、1834年、くしくも新救貧法が試行された同じ年に68歳で生涯を終えている。有名な『人口論』は1798年に、これまた偶然だが、ワーズワース、コールリッジの共同編纂による『叙情民謡集』(*Lyrical Ballads*)が出版され、文学史的に言えばロマン主義の開始が告げられた同じ年に世にまみえている。つまり、1798年という年は、ロマン主義という文学上の革命を促す書物と、政治・経済的な構造改革を促す書物がそれぞれ出版されたという意味では極めて重要な年なのである。この『人口論』は、マルサスが没する34年まで、6版まで出版され、その度に加筆訂正され、死後出版された最終版(7版)では倍の規模にまで膨れ上がっている。但し、ディケンズを含め、当時の文人に大きな反響を呼んだのは主に1798年の初版と1803年の二版に限られるようだ。それ以降の版は論調の変化は見られるものの、左程、目新しいことが追加されたわけでもなく、またマルサス理論に刺激された「自由放任経済」も50年以降は翳りを潜めることになるため(Altick,131)、三版以降は以前の版に比べ議論の対象となることもないように思われる。従って、ここでは全ての版の異同に注目するのではなく、初版、第二版で議論の中心となった箇所を主に概観していく。

マルサスはまず「序文」で、このテキストを、そもそもウィリアム・ゴドウィン（William Godwin）の『政治的正義』（*Political Justice*, 1793）に表明されている実体を欠いたと思われるユートピア的な理想主義に触発されて、執筆したと述べている。そして、注目すべき（ゴドウィンが無視したと思われる）事実として「人口」の問題を取り上げる。人口は“the level of the means of subsistence”(15)にとめて置くべきだが、誰もその方法について考察した者はおらず、ユートピア的な“a view of these means”(15)が社会の改善、発展の大きな障害になっている有様だと慨嘆する。結果としていさいさか「憂鬱な色彩」（“a melancholic hue”, 15）を帯びた将来像を提出せざるを得なかったと弁明する。

マルサスは、まず自然界を支配する二つの法則、食料は人間が生存するためには必要不可欠であり、また両性間の情念（“the passion”）も殆ど不変である(19)と考えれば、人口の増加は食料供給量をやがて上回ると主張する。その点では現在、巷で流行しているゴドウィンのような議論は両性間の情念について全く考慮を怠っているのである。こうした“population”と“production in the end” (20)への配慮を欠いた議論が、“the perfectability of society” (20)の実現には大きな障害になるという。なぜなら、人口というものは抑制が働かないと“a geometric ratio”(22)で増え続けるが、下層階級の間では人口の増加の割合と食料増加の割合に大きな隔たりがあるため、その歪みがとりわけ顕著に出ているという。それが余り問題視されなかったのは、歴史が専ら上、中産階級に占有されていたからである。ここから有名な法則、つまり人口の幾何学的な増加と食料の算術的な増加の不均衡というテーゼが引き出される(21)。しかし、ここで大切なのは人口に対する抑制（“the constant operation of the strong law of necessity acting as check upon the great power”, 23）を一体どこに、正確に言えばどの階級に置くかという考えである。2章の冒頭でマルサスはこう主張する。

I think it will be allowed that no state has hitherto existed (at least that we have any account of) where the manners were so pure and simple, and the means of subsistence so abundant, that no check whatever has existed to early marriages, among the lower classes, from a fear of not providing well for their families, or among the higher

classes, from a fear of lowering their condition in life. (21)

マルサスは下層、中産階級ともに言及しているが、重点が置かれているのは前者、すなわち下層階級だろう。更に続けて“the power of population being left to exert itself unchecked, the increase of the human species would evidently be much greater than any increase that has been hitherto unknown” (21-22)と述べ、「抑制」の必要性を訴えている。繰り返すが、大切なのは「抑制」の対象となっているのが専ら、下層階級なのである。

この考えはテキストを通して一貫している。ヒューム (David Hume) の人口算定法の不徹底さを指摘すると、今度は下層階級における“the preventive check”(34)の重要性、緊急性が繰り返されることになる。とりわけ、結婚により生活程度を落とすとなると、多くの婦人、又はそれを負担と感じる男性により結婚が等しく忌避される事になるのは、商人、農民の息子、労働者らの階級には遍く該当すると主張する箇所 (34-35) に出くわすと、誰しも市参事会員キュートの無慈悲な台詞を思い出すだろう。そしてここから救貧法に話は及ぶ。ただし、これは1834年に廃止される旧法であり、マルサスの批判の対照になっているのはスピーナムランド (Speenhamland) 方式という院外の慈善行為である。これは1795年にバークシャー (Berkshire) で試験的に行われたものが、全国規模で拡大したものである。オルティック (R. Altick) はこう説明している。

This was a primitive guaranteed minimum income scheme by which low wages were supplemented from public funds, the dole being scaled to the size of family, so that, as in modern welfare practice, each additional child meant extra money — in this case, eighteen pence a week. As the principles of political economy gained adherents, this was regarded as a most unsatisfactory way of dealing with the problem of the poor, because it was inefficient and wasteful and put a premium on anti-social fecundity and immorality. (Altick, 121-2)

これにより貧民の院外救済が許され、大量の労働力の確保も可能になるが、同

時に弊害も生じる。マルサスは更に異を唱える。というのは、困窮を撲滅するために多額の税金が投入されているにも拘わらず、現実には一向に貧困の問題が解決されないからだ。そして旧救貧法が貧民の状況を悪化させている原因として理由を二つ挙げている(39-41)。イングランドの小作農民の間には幸いにも「独立の気風」(“a spirit of independence”, 40)が残っており、他人に依存せず生活する気概が保持されていた。救貧法はこのような精神風土を脆弱なものにし、逆に、養えないにもかかわらず結婚に踏み切る労働者の存在を許容してしまった(40)。また、“the price of provision”の高騰を招き、労働の実質的な価値を弱めてしまったために、人々の間に気風として残存していた節制と勤労の美風を更に弱めてしまった。このような風潮に対して、マルサスは節制を怠っている労働者も教区の庇護が当てに出来なければ、酒場に行くしかない、つまり自堕落の生活を送るしかないだろうと想定する。制度としての救貧院(workhouse)の創設はこのような文脈で提案される。該当箇所は次のようになっている。

Fortunately for England, a spirit of independence still remains among the peasantry. The poor-laws are strongly calculated to eradicate this spirit. They have succeeded in part, but had they succeeded as completely as might have been expected, their pernicious tendency would not have been so long concealed. . . . If men are induced to marry from a prospect of parish provision, with little or no chance of maintaining their families in independence, they are not only unjustly tempted to bring unhappiness and dependence upon themselves and children, but they are tempted, without knowing it, to injure all in the same class with themselves. A labourer who marries without being able to support a family may in some respects be considered as an enemy to all his fellow-labourers. (40)

この背後には、院外救済がスピーナムランド法の存在により広く容認され、更にピット(William Pitt)の法案提出により当然視されるようになってしまった(54)事に対する根強い不満が存在する。ところで、労働者を取り巻く状況をこ

のように全く考慮せずに、一方的に“a spirit of independence”を高らかに説く背景には、貧困というものを政治・経済的な観点から説こうとする合理主義的な精神とは程遠く、これをあくまで個人の道德の問題へとすり替えようとする功利主義者の思考が透けて見えるのである (Houghton, 184-6)。ホートンに拠れば、「仕事」は「神」に次いで数多く人々に口にされた言葉であり、これは“a supreme virtue”としての「仕事」と同じように、「怠惰」(“idleness”)への戒め、軽蔑を含む言葉であったという。これに加えて「仕事」には“the service of God in his secular calling” (244)という含意があり、そのため「怠惰」は「罪」のみならず神の意志の放棄、従ってそこには誘惑に対する“safeguard”としての役割もあったという (245)。怠惰への戒め、個人の(人格的)陶冶としての「使命」としての価値観や思考に「仕事」が染まるにつれ、その対極として位置づけられる「貧困」も経済、政治の問題というよりは個人の道德のそれへと矮小化されて行く。その過程で、労働と宗教が分かちがたく結びついているヴィクトリア朝の特異な精神風土を見ることは容易であろう。

当然、このような偏狭な精神は功利主義者に限られるものではない。寧ろ、営利活動を神の意志にかなったものと「合理的に」解釈しようとするピューリタンにも良く見られる思考である。経済史家トーニー (R. H. Tawney) は『キリスト教と資本主義の興隆』(*Religion and the Rise of Capitalism*, 1926)の中で、蓄財に励む余り俗世間を蔑視、又は敵視するピューリタンの例をカルヴァン (Calvin), ツ빙グリ (Zwingli) からハリス (Walter Harris), トマス・オルコック (Thomas Alcock) 等の例に見ている (216, 224)。そして、とりわけピューリタンの反世俗的、敵視的な態度をカソリック・アングロニカンとの比較においてこう指摘している。

Where they (Catholic and Anglonican) had seen society as a mystical body, . . . he (the Puritan) saw a bleak anthithesis between the spirit which quickened and an alien, indifferent or hostile world. Where they had revered the decent order whereby past was knit to present, and man to man, and man to God, through fellowship in works of charity, in festival and fast, in the prayers and ceremonies of the Church, he turned

with horror from the filthy rags of human righteousness. (190)

ウェーバーはその有名な著書、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（*Die protestantische Ethik und der »Geist« der Kapitalismus*, 1905）の中で「来世を目標としつつ、現世の内部で行われる生活の合理化こそ、禁欲的プロテスタンティズムの職業観念の帰結にはほかならなかった」（217）と指摘している。トーニーが挙げたのはウェーバーの言う「世俗内禁欲」の極端な例証である。ここにスクルージの姿を認めるのは困難な事ではないだろう。寄附を求める紳士たちに対して“*It's enough for a man to understand his own business, ...*”(12)と述べて寄附を断り、道行く人々の嬉しそうな姿に対して敵意を露わにするスクルージとトーニーやウェーバーが指摘する偏狭なピューリタン像は寸分の違いもなく重なるのである。また、批評家のエドガー・ジョンソン（Edgar Johnson）はスクルージを“*a personification of economic man*”（Johnson, 485）と評し、『キャロル』と『マーティン』の親近性を指摘しているが、これは両テキストがこの頃、執筆が一時的に重なり合うことを考えれば十分納得がいく。1843年12月は『マーティン』の分冊12（30～32章まで）に該当する。更にその前の分冊8, 9あたりの部分は主人公マーティン（Martin Chuzzlewit）がアメリカでの会社規模の詐欺行為、アングロ・ベンガル会社の詐欺まがいの投機に出くわす場面で、経済的な利己主義の最も露骨なありようが風刺されている箇所でもある。そうした文脈に置けばスクルージも『マーティン』と同じく、経済的な利己主義の権化と考えるのは必ずしも的外れではあるまい。ホートンの言葉を借りれば、スクルージという人物造型を通して示されるのは「社会の同情」（“*social sympathy*”）と「資本主義（商業）精神」（“*the commercial spirit*”）の両立しづらさである（Houghton, 192）。

貧者、下層階級に対してマルサスやその影響を受けたと思われる功利主義者たちの抑圧的な態度がより一層、はっきりするのは、マルサスの第二版(1803)である。ワールツ・クラシックス版の編者グランシー（Ruth Glancy）は“*decrease the surplus population*”(12)の注釈で『人口論』の第二版を挙げているが(473)、それはこの第二版において最も悪名高い抑止論が主張されたからに他ならない。

編者はそれを念頭に置いたのだろう。それが、かの有名な「道徳的抑止」 (“moral restraint”) という概念である。マルサスはこう説明している。

All the immediate checks to population, which have been observed to prevail in the same and different countries, seem to be resolvable into moral restraint, vice and misery; and if our choice be confined to these three, we cannot long hesitate in our decision respecting which it would be most eligible to encourage. (131)

そして、“the duty of each individual not to marry till he has a prospect of supporting his children” (132)という言葉で締め括っている。このマルサスの言葉遣いは、メグ、リチャードの結婚を聞き “very unbecoming and indelicate in one of your sex” (132)と驚き、彼らを待ち受ける暗い未来を予見する(133) 市参事会キュートの話し振りをいとも簡単に思わせる。スクルージが口にした「余剰人口」の扱い方の問題は、この第二版でほぼその全体像を表わしたと考えられる。マルサスの意図とは別に^{注①}、専ら下層や低所得者の階級に対して彼らが「余らない」ようにするためには「生」(食糧)と「性」(結婚)を制御することである。つまり、食糧を制限し、なお且つ自活できるまで結婚を控えさすことにより、労働者階級とその人口を管理下に置くことなのである。マルサスの影響はマーシット婦人 (Mrs. Marcet) という女流作家の小説 (*John Hopkins's Nations on Political Economy*, 1833) にも見られるという (Slater, ed. 262-3)。こうした「生」と「性」、または「人口」が持つ政治的、経済的な意味を支配階級がどのように考えていたかを、ミッシェル・フーコー (Michel Foucault) はこう指摘している。「18世紀における権力の技術にとって大きな新しい様相の一つは、経済的・政治的問題としての「人口」の問題であった。富としての人口であり、労働力あるいは労働能力としての人口であり、それ自体の増大と資源としてのその可能性との間の均衡関係において把えた人口である。政府は気が付いたのだ、相手は、単に臣下でも「民衆」ですらもなく、「人口」という形で捉えられた住民であって、そこにはそれ固有の特殊な現象と、固有の変数があると。出生率、罹病率、寿命、妊娠率、健康状態、病気の頻度、食事や住居の形がそれだ。…

このような人口を巡る経済的・政治的問題の核心に、性があった」（Foucault, 35）。引用の18世紀を19世紀ヴィクトリア朝に替えても、フーコーの言説は十分、妥当性がある。つまり、ディケンズはもとよりカーライル、ディズレイリーなどのマルサス理論にこぞって反対した作家、文人にとり、それは「余剰人口」という大義名分のもとに労働者階級を「性」（結婚）と「生」（食糧）の両面から管理下に置くことで抑圧する言説として作用した事を意味したのだ。オルティックが指摘するように、ヴィクトリア朝中期以降では「マルサス主義」を表わす“Malthusianism”が“birth-control”を婉曲的に表わすようになったという（Altick, 121）。1820年から30年台に流布したのは、まさしく以上のような性質を帯びた言説であり、34年の新救貧法の導入の背景に32年にエドウィン・チャドウィック（Edwin Chadwick）らが中心となって作成した王立委員会の答申、マルサス的な勤労観に基づくと思われる、が後押ししたのである^{注②}。

それでは、ディケンズはこのような「理論」に対してどのような批判を、どのような形で展開したのだろうか。それを各々のテキストにおいて探るのが次章の狙いである。

3・祝宴の政治学

『クリスマス・ブックス』の全篇の五つの物語を通して一番目に付くのが、数多く開かれる祝宴の風景である。クリスマス・シーズンの発売を当て込んだ営業上の配慮ばかりではないだろう。『キャロル』では過去の幽霊と共に降り立った街角は“the hopeful promise of the day”(49)に溢れており、クリスマス・イヴの喧騒に満ちた街角の様子を伝えている(50)。スクルージが過去の幽霊と共に見るフェズウィッグ（Mr.Fezziwig）親方の宴でも部屋は歌声に溢れ、“the warehouse was as snug, and warm, and dry, and bright a ball-room, as you would desire to see upon a winter’s night”(35)とその家庭的な雰囲気強調される。同様の光景は他のテキストでも見られる。トロッティ・ヴェックは自宅でウィリアム・ファーン（William Fern）とリリアン（Lilian）に“the hissing bacon”(134)のご馳走を振舞い、新年になるとメグとリチャードの結婚を祝う(180-1)。大団円が祝宴で占められるのは『炉辺のこおろぎ』も同じである。ここでは、メイ・

フィールディング (May Fielding) とエドワード・プラマー (Edward Plummer) の結婚とピアリービングル夫妻 (Mr. and Mrs. Peerybingle) の結婚一周年を記念する祝宴が同時に催されている場面で話が閉じる。『憑かれた男』ではテタビー一家 (Tetterby) の夕食の様子(409, 449)が挙げられる。しかし、全編を通して一番印象的な祝宴は、何といても『キャロル』のボブ・クラチット (Bob Cratchit) の家で行われるクリスマスの祝いである。

Hallo! A great deal of steam! The pudding was out of the copper. A smell like a washing-day! That was the cloth. A smell like a eating-house and a pastrycook's next door to each other, with a laundress's next door to that! That was the pudding! In half an minute Mrs. Cratchit entered — flushed, but smiling proudly — with the pudding, like a speckled cannon-ball, so hard and firm, blazing in half of half-a-quatern of ignited brandy, and bedight with Christmas holly stuck into the top. . . . At last the dinner was all done, the cloth was cleared, the hearth swept, and the fire made up. The compound in the jug being tasted, and considered perfect, apples and oranges were put upon the table, and a shovel-full of chestnuts on the fire. (54-5)

ボブ・クラチット家での祝宴は二つの意味で重要な分岐点となっている。まず、第一にこの宴が食の政治性というものを示す機縁となったということ。つまり、有り余るほどの食材、ご馳走をふんだんに見せ付けることにより、中産階級的な食のあり方が少なくとも下層の人々にとって羨望の的となるような理想的な祝宴として人々の脳裏に刻み込んだということである。これは既に、現在の幽霊の居る部屋にふんだんに積まれた料理に豊富さにその一端を垣間見ることが出来る。“Heaped up on the floor, . . ., were turkeys, geese, game, poultry, brawn, great joints of meat, sucking-pigs, long wreaths of sausages, mince-pies, plum-puddings, barrels of oysters, . . .”(45)といった具合に食材、料理が列挙され、挿絵画家ジョン・リーチ (John Reech) の挿絵によって視覚化されている(図①)。これらの豊かさは他の食事場面と比較すれば一目瞭然だろう。娘のメグがトロツィ・ヴェックに持ってきた夕食は“Polonies”でも“Trotters”, “Livers”,

“Pettitoes”でもなく、“Tripe”であり、それが“it was the best tripe ever stewed”(103)といった具合に彼らには最上のご馳走なのである。ファーンが喜んで口にするのも“the hissing bacon”(134)に過ぎない。テタビー一家の食卓に並ぶのも“a substantial slab of hot pease pudding wrapped in paper, and a basin covered with a saucer”(409)と至ってささやかで在る。つまり、ボブ・クラチットやリーチが描くところの幽霊の祝宴のありようは、当時の労働者階級にはまさしく羨望の的、経済的に手に届くことがないご馳走なのだ。それが明白になるのは改心したスクルージ



SCROOGE'S THIRD VISITOR

図表①

が路上の少年を呼びつけ、タイニー・ティム少年の二倍もある“the prize Turkey”(80)をボブ・クラチットの家へ届けさせる場面である。ここでようやく、ボブとクラチット家の家族は、スクルージが現在の幽霊の部屋で目の当たりにしたのと同じようなご馳走にありつくことが出来るわけである。

ウォーターズはクラッカー、クリスマス・ツリーの家庭への導入が中産階級のクリスマスの習慣としてとして定着し、それが“an illusion of social harmony, establishing the values of the bourgeois family as a norm” (Waters, 69)を与え、“national identity”の拠り所になったと指摘する。そして、次第に一元化される食事メニューのなかで七面鳥が圧倒的な人気を誇ったものの、一般の人にはとても高値のため入手できず、Gooseですら一年間の積立金でクリスマスに購入したという。1840年代になるとそのための Goose Club が流行した事実を挙げている。(Waters,

69)。これで思い出されるのが世紀末の1892年に発行されたコナン・ドイル (Conan Doyle) の『ホームズの冒険』(*The Adventures of Sherlock Holmes*) 中の「青いガーネット」(*The Blue Carbuncle*) という一編である。これは、それこそ1891年12月の『ストランド・マガジン』(*The Strand Magazine*) に発表されたもので、物語の舞台もクリスマスが背景になっている。盗まれた宝石が鶩鳥の腹から出てきたので、ホームズ (Holmes), ワトソン (Watson) が調査すると、ある下町のパブに、クリスマスに鶩鳥を買うために会員が資金を積み立てている鶩鳥クラブがあることを突き止める。つまり、ホームズ物が発表された1890年代当時ですら、鶩鳥ですらそこそこの高値であり、週15シリングのボブが何とか年末に鶩鳥を入手できたのもこうした“The Goose Club”の存在に拠っているのである(図②)(*A & P. Mail*, 115)。ホームズとワトソンが突き止めたのも図②で描かれているような場末の酒場である。となると、『キャロル』当時の七面鳥がどれだけご馳走かは想像するのは容易だろう^{注③}。つまり、七面鳥を添え物として大盤振る舞いすることが豊かさの象徴であり、日々の糧すら事欠く下層階級の人々にとって、まさしく溜飲を下げるように思われたのではないだろうか。エンゲルス (Friedrich Engels) は『イギリス労働者階級の状態』(*Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, 1845)の中で餓死を“social murder”(70)と呼んで



Buying the Christmas goose (1882).

図表②

いる。つまり、それほど餓死が一般化し、労働者の食糧事情は悪化していたのである。“You snatch your tripe, my friend, out of the mouths of widows and orphans” (110)とトロッティ・ベックを批判する市参事官のキュートの言葉が、そもそも労働者の人々の間では慢性的に食糧が不足していたことを示すものである。従って、『クリスマス・ブックス』において食事や飲食等の行為はあくまで物質的なものであり、“a sexual symbolism” (Muresianu,49) と見る以前に労働者の置かれた状況を考慮すべきだろう。豪華な七面鳥（鶩鳥ではなく）が添えられた食卓だからこそ読者は溜飲を下げ、改心したスクルージの姿が似合うのだ。

ところで、先に引用したウォーターズはこうした祝宴が“social harmony”を演出していると述べている。ここでいう「社会的調和」の最もたるもの最小の単位にあたるのが、「家族」であることは言を俟たないが、それ以外にディケンズが特に重んじた人間関係のあり方として主従関係、とりわけ親方と徒弟の関係である事を改めて指摘しておきたい。『キャロル』に限ってみれば、それはフェズウィッグ親方と若きスクルージであり、またスクルージとボブ・クラチットもそれに当たる。バットはこれがディケンズの好みのテーマであり、“the relations between himself and his employers involve a mutual duty and responsibility” (Butt, 136)と指摘している。一見、古めかしく伝統的な主従の関係がこの時期のディケンズにとりいかに重要であったかは、同じ頃、執筆されていた『マーティン』では、ヤング・マーティン (Young Martin) とマーク・タップレー (Mark Tapley), 老マーティン (Old Martin) とトマス・ピンチ (Thomas Pinch) という形で反復され、また少し以前に出た『ハンフリー親方の時計』 (*Master Humphrey's Clock*, 1842) では何とサムエル・ピクウィック (Samuel Pickwick) とサム・ウェラー (Sam Weller) の復活という形で再度、取り上げられていることを見れば充分、納得がいく。

つまり、カーライルが批判した「金による人間関係」 (cash-nexus) と対極にあるのが、こうした伝統的な人間関係のあり方であり、これはディケンズが「家族」を描くときも変わらず、基調になっているように思われる。たとえ、それが近代的な核家族の装いをしていようとも、訴えていることは伝統的な主従の絆を大切にするという感性であり、そのことを忘れるべきではないだろう。

(続く)

注

- ① この論文ではマルサス理論の主に前半部分を取り上げたが、マルサスのそもそもの執筆動機は、ゴドウィンのように精神主義的な見方から、人間の物理的、肉体的な欲求を無視して、社会建設を夢見る非現実的な思考に対する反発である。とりわけ後半部分の12から15章あたりになるとゴドウィンに対する批判は激しさをます。但し、マルサスも女性の貞操の危機とそれが社会に齎す波紋や(73-4)、純粋な愛と崇高な徳性の両立について弁じているが(11章)、その実現を促す具体策の裏づけには欠けている。そのため、この部分のマルサスの筆致は幾分、観念的であり、社会悪の存在は認めつつも、その消滅を目指すというよりも、それをどう忌避するかということに比重を置く(139)。とはいえ、最終章では真理への知識欲に強く訴える一方で、社会的な共感の存在に大きな期待を掛けているマルサスの姿勢は不偏不党であり、公平に評価すべきだろう。
- ② チャドウィックの報告書は次の三点を主張しているという。労働能力者に対する院外救済の廃止。救済はすべからず救貧院で行われること。更に、これを実効性のあるものにするために実行される救済行為は、労働能力の有る者は、労働能力の無い者を上回った救済行為を得ることは出来ない。「その意味でこの提案は、将来にむかっただの低廉な労働者市場の創出を狙っており、まさに工業化とブルジョワ自由主義の哲学を反映するものであった」(『世界歴史大系イギリス史3』、83)という。ここで指摘されている「ブルジョワ自由主義者の哲学」がマルサス主義、或いはそれに基づく経済の自由放任主義を指すことは言わずもがなである。
- ③ スクルージが最後に七面鳥をクラチットの家が届けるという「慈善行為」が極めて非現実的に映ったことは、しばしば指摘されている通りである。例えば、当時の*Westminster Review* 紙では次のように批判されている。

A great part of the enjoyments of life are summed up in eating and drinking at the cost of munificent patrons of the poor; so that we might almost suppose the feudal times were returned. The processes whereby poor men are to be enabled to earn good wages, wherewith to buy turkeys for themselves, does not enter into the account; indeed, it would quite spoil the denouement and all the generosity. Who went without turkey and punch in order that Bob Cratchit might get them — for, unless there were turkey and punch in surplus, some one must go without — is a disagreeable reflection kept wholly out of sight. (Collins. ed., 152-3)

この際、問題なのはスクルージの慈善行為が現実に裏付けられたということではなく、抑圧的なマルサス理論に対して身体と感覚という、理論を越えた感性に訴えるものである事はいうまでもない。その点では、評者のホーン(R.H.Horne)が指摘している様に、大切なのは“eating and drinking”なのである。

参考文献：

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. London: J. M. Dent & Sons, 1974.
- Butt, John. *Pope, Dickens and Others*. Edinburgh: at the University Press, 1969.
- Chapman, Raymond. *The Victorian Debate*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1968.
- Collins, Philip. Ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Keagan Paul, 1971.
- Dickens, Charles. *Christmas Books*. Ed. by Ruth Glancy. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- Dickens, Charles. *Christmas Books*. Vol.1 Ed. by Michael Slater. Harmondsworth: Penguin Books, 1984.
- Dickens, Charles. *Nicholas Nickleby*. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- Engels, Friedrich. *The Condition of the Working Class in England*.
Harmondsworth: Penguin Books, 1987. Trans. of *Die Lage der arbeitenden Klasse in England*, 1845.
- Fehr, Bernhard. "Dickens und Malthus", *Germanische-Romanische Monatsschriften*, 2(1910):542-555.
- Foucault, Michel. 『性の歴史 1 知への意志』 渡辺 守章訳 東京：新潮社、1986. Trans. of *Historie de la sezialite*
- Himmelfarb, Gertrude. *The Victorian Minds*. Weidenfeld & Nicolson, 1968.
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870*.
New Haven: Yale University Press, 1985.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens* vol. 1 London: Victor Gollancz Ltd, 1953.
- Malthus, Thomas Robert. *An Essay on the Principle of Population*. London: W. W. Norton, 1976.
- Miall, Anthony & Peter. *The Victorian Christmas Book*. New York: Pantheon Books, 1978.
- Muresianu, S.A. *The History of the Victorian Christmas Book*. New York: Garland Publishing, 1987.
- Tawney, R. H. *Religion and the Rise of Capitalism*. New York: Mentor Books, 1952.
- Waters, Catherine. *Dickens and the politics of the family*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Weber, Max. 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』 阿部 行蔵訳、『世界の
大思想23 ウェーバー 政治・社会論集』所収、東京：河出書房新社、1965. Trans. of *Die
protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus*, 1905.
- 村岡 健次、「改革の時代」、『世界歴史大系 イギリス 3』所収、東京：山川出版社、1991.